

植物と食物

—— 『とんがりもみの木の国』における共同体 ——

長岡 亜生

I

トッド夫人と私は、仕事上の関係が変化したとはいえ、疎遠になることはなかった。それどころか、深く親密な関係がはじまったように見えた。¹

セアラ・オーン・ジュエットの『とんがりもみの木の国』（1896年）の語り手である無名の女性は、6月のある日、久しぶりにメイン州の海辺の村ダネット・ランディングを訪れ、未亡人アルマイラ・トッド夫人の家に下宿する。そして薬草の採集期で忙しい夫人のかわりに、薬を求めて来る村人たちの相手をすることになる。トッド夫人に受け入れられたという思いでうれしく精を出す反面、本来の目的である執筆の仕事がはかどらない。仕方なく語り手はもう手伝うことはできないと夫人に言う。

それに答えてトッド夫人は悲しげに語る。「あなたがここにいてくれるから、あてにしすぎちゃったわね。こんなに収穫が多い年はここ何年もなかったのよ。でもこんなに信頼できる人はこれまでいなかったんだもの。あなたに欠けているのは多少の才能ね。でも時間がたてば判断力や経験が得られるし、あなたも商売においてかなり有能になれるわ。」(7) トッド夫人は語り手を自分のいわば助手として信頼しはじめていた。その夫人とのつながりを語り手は、自分の仕事のために絶とうとしたように見える。が、その後ふたりはますます親密になっていく。

小説の第12章冒頭で、語り手はこう書いている。

島の内外から時折やってくる客をトッド夫人が手厚くもてなし、食事をごちそうするとき以外は、私たちは夏の間ずっとふたりきりで過ごした。しかし7月の末に侵入のきざしがあった。フォズディック夫人とかいう人がはるか彼方の水平線上に浮かんだ見知らぬ船の帆のように現れたのだ。そのとき私は非常に不安になった。それまで私は、風変わりで小さな家に、安心してなんの警戒心も抱かず住んでいた。その家にいると、あたかもひとまわり大きなからだ、も

しくは貝がらに包まれているかのようなようだった。その貝がらの変哲もない渦巻き
のなかにトッド夫人と私は身を潜めていた。ひとりの訪問者、さまようヤドカ
リかなにかが、自分用にとこの小さな客間にねらいをつけるまでは。…… (55)

フォズディック夫人は「ヤドカリ」のように島の家々をつぎつぎに訪問して
いるらしい。トッド夫人の旧友とはいえこの女がやって来るといので、語
り手は心中穏やかでない。自分とトッド夫人だけの、「貝がら」のように外
界から閉ざされた心地よく安心な家、ひいてはふたりの親密な関係が脅かさ
れることを恐れているのである。

ところが語り手の心配にもかかわらず、このふたりは、フォズディック夫
人をまじえて話をしている最中も、「互いに愛情に満ちた眼差しを交わしあ
う。しかもそれは、この家に來たばかりのフォズディック夫人には理解でき
ないものだった。」(62)。夫人の「侵入」を受けようとふたりの親密な関係
は不変なのである。

ダネット・ランディングは、かつては栄えた港町であったが、捕鯨、船舶
業の衰退によりいまではもうすっかりさびれてしまっている。男たちは活動
を奪われてしまった。しかし、女たちの生活は基本的に不変である。この村
には引退した船長や老人を除いて、男の姿はほとんど見られない。ほとんど
が死んでしまったか、村を離れてしまったかなのである。² それでも主に菓
草で生計を立てるトッド夫人のように、男のいない世界で女たちはみな独立
した生活を営んでいる。そして互いの家々を行き来しあうことで、連帯感を
強めるのである。ボウデン家の場合も、「女王」として君臨するトッド夫人
の母親ブラケット夫人を中心に一家が形成されている (98-99)。女性が中心
となり協力しあって、共同体を動かすのである。

このように『もみの木』では、女たちが愛情と共感で密接に結びつく共同
体が際立っている。まさに『女性の共同体』という著書のなかでニーナ・ア
ウバッハは次のように論じている。

繰り返し現れる文学上のイメージとしての、女たちの共同体は、男のためにそ
して男を通して生きる、男性が承認してはじめて大人の共同体で市民権を獲得
する孤独な女という因襲的な理想像に対するひとつの抵抗となる。そもそもわ
れわれの文学的想像力からとりついて離れることのなかったこの女の共同体は、
女性の独立の象徴であり、願望と恐怖の両方を喚起しながら、団体としての女
たち自身の実在を生み出すのである。³

男性中心主義が蔓延する社会において、反抗し、団結することによって、女は男を排除した世界を創造する。そこでは、女はもはや社会的に弱いひとりの人間ではなく、男に依存しない強力な存在なのである。

エリザベス・アモンズによれば、「白人のフェミニスト批評家の多くは、この母親中心の共同体——そこでは女（トッド夫人とブラケット夫人）が実際の権力と地位、父権制的ヘゲモニーの外側、あるいは歴史的比喩を使えばそれ『以前の』居場所をもつ——を神話化し讃えるものとして、ボウデン家の再会とこの小説全体を好意的に読んできた。」⁴ 女だけから成るこの世界は、フェミニストの見地に立てば、父権制以前のいわゆる母権制社会を再創造する試みであるという意味において礼賛すべきものである。

しかしながら、この社会には差異排除の構造が隠されているとも考えられよう。サンドラ・A・ザガレルは言う。

〔この作品の入り組んだ構造やダネット・ランディングの母親中心性といった、普遍的で、読者を包含する特質としてこれまで称賛されてきたもの〕は、仲間どうしのきずなをつねに確かめる共同体を力強く表象するのに役立つ。が同時に、あるひとつの人種に限定する共同体を巧みに創造する。そして重要な意味において、共同体の構成員とは異なる人々を表象的に排除することにもなる。⁵

ジュエットの描く共同体は、構成員を固いきずなで結びつけると同時に、異質なものを／よそ者を排除する。歴史的にも、世紀転換期のアメリカではアングロ・サクソンの血の純粋さを守るために移民を制限、さらには排除しようという動きが見られた。⁶ この19世紀末アメリカの文化的コンテクストに照らせば、ジュエットにも人種差別的なイデオロギーが浸透していたと考えても不思議ではない。

「ボウデン家の再会是人種の純粋さと白人の文化支配に関わる。そこで讃えられているのは白人の民族的誇りであり、ボウデン一家から拡大したアングロ・ノルマン系の血統である……。」とアモンズは述べている。⁷ けれどもこの排他性の強い共同体が、白人至上主義あるいはゲルマン民族至上主義をいかに主張するかを論じるのは、小論の目的ではない。私が注目したいのは、むしろボウデン家の排他性のあらわれ方である。

『もみの木』においては、語り手がトッド夫人とのきずなを深めていく過程が物語の核になっている。このふたりの女を結びつけるうえで重要な役割を担うのは主に植物と食べ物である。が、そこには土着主義、さらには排外主義が潜在する。本稿ではまず、作品中描かれる植物に着目し、ダネット・

ランディングという土地に根づくものに与えられる高い評価の背後にある土着主義思想を確認することにする。次に、小説第18-19章の「ボウデン家の一族再会」とくに饗宴の場面において、一族が結束を固める一方でいかに異質なものを／他者が排除されているかを考察する。そのうえで、ニュー・イングランドの廃れゆく小さな村の共同体に生きる住民たちがどのように描かれているのかみてみたい。

II

『もみの木』第2章で、語り手はトッド夫人の庭を以下のように描写している。

……花の咲いたあらゆる植物と、はなやかなタチアオイが二、三本、そしていくらかのヒカゲユキノシタとが、灰色のこけら板をはった家の壁に押し返されていた。ちょっと変わった小さな庭で、不案内な人はまごついてしまう。緑が多すぎて少数派の花々は不利な状況に置かれていた。けれどもすぐにトッド夫人は葉草を、野生のも栽培されたのも、心から愛しているのだとわかった。家のいちばん端にある低い窓に海風が吹きこんでいた。そのあたりにはスイート・ブライアーやスイート・マリーだけでなく、コウスイハッカもヤクヨウサルビア、ルリヂサ、ハッカ、ヨモギ、サザン・ウッドなどもたくさん生えていた。…… (3)

興味深くも、庭で栽培されている花や葉草の名前が列挙されている。まるで世界中の植物を網羅するような勢いである。これほど多種多様の植物が生息していることを作者は示そうとしただけなのかもしれない。が、果たしてそれだけであろうか。

こんなしゃきとしたヨモギギクはこの辺では学校の周辺でしか見られない、とトッド夫人は語り手に説明する (12)。同様に、第10章「ペニーローヤルハッカの育つ場所」で、語り手を連れてグリーン・アイランドを訪れた夫人は、章題にもあるミントの一種について誇らしげに語る。「ペニーローヤルでもこんな純粋種は、世界中を探したって、メイン州でもこの島にしかない。これこそが本物で、ほかの地域にあるのはすべてまがいものでしかない。」と (48)。このように、庭の草木に加えて、特定の場所にしか生息しないとされる植物も示される。こうして列挙される植物名の背後には、まさしくニュー・イングランドの土着主義が隠されている。ダネット・ランディングの土から生えてくるもの、古くから根づきそこで生きるものに価値が見いだされるのである。

「とんがりもみ」というある種のもみもこの地方に根づいた植物であるらしい。小説の冒頭で語られるように、何年かぶりにこの村に戻ってきた語り手の目にまっさきにとびこんでくるのが、相変わらず海岸線に並んで生えているそのもみなのである(2)。物語のタイトルにあるだけではなく、この木は作品中しばしば言及されている。メアリ・エレン・チェイスは、ジュエットと結びつきの強いメイン州はまさに「とんがりもみの木の国」として知られていると述べている。⁸ とんがりもみといえばダネット・ランディング、ダネット・ランディングといえばとんがりもみというように、この木はこの村を象徴するものといえよう。

「彼女はいつもちょうどどこにいたわ。そう、彼女がどこにいるかはふつうの花をさがすようにすぐわかったの」と、トッド夫人はいまは亡きサラ・ティリィを植物にたとえる(128)。ボウデン家に行く途中も、馬車から見えるさまざまな種類の草木を観察しながら、トリネコの木についてこう語る。「前にこの道を通ったときにはあの木はしおれて、がっかりしているようだったわ。成長した木はときどきこんなふうな行動をとるものよ。人間も同じね。……」(92)。人間にも植物にも同じ語彙が使われ、指示対象が不明瞭になっている。⁹ さらに、仲間とは異なる行動をとるサンティン・ボウデンという男について「ちょうど植物と同じで人間にもはぐれた人がたくさんいる」と述べる。そして語り手はそういう夫人を「植物的以外のなにものでもない人」とみなしている(102)。この作品では概して植物への言及が多いが、このようにジュエットはダネット・ランディングの住人さえ生物学の用語を用いて表現するのである。

トッド夫人「お気に入りの」ペニーローヤルハッカ(131)の束を差し出された語り手は「熱狂的に」夫人に賛同し、そのすばらしい匂いを認める(48)。薬草を栽培するだけでなく、薬草医として村人の治療にもあたるトッド夫人は、当然自然界全般にも通じている。その手ほどきを受け、それまで植物にあまり詳しくなかった語り手も、いまはどの花が咲く時期か、もうすぐどの薬草を摘む季節になるか、すらすら言えるまでになった(12)。彼女はトッド夫人の薬草学の神秘的な力、豊富な知識を伝授され、自然との関わりを深めていく。都会から来て一時的に滞在しているだけの自分は「ほんとうにダネット・ランディングに属している人間ではない」と当初強く感じていたにもかかわらず(15)、夫人を通してその地域の精神を共有するようになっていくのである。ここには作品の大きなテーマになっている、ふたりの女性の結びつきのプロセスが垣間見られ、そこでは植物が重要な役割を果た

しているのである。

III

ボウデン家が毎年夏におこなう盛大な一族再会の集まりに、語り手はトッド夫人に連れられて参加する。この催しが、共同体の一員としてふたりを決定的に結びつけるきっかけとなる。ボウデン家に会した一族の者は、老いも若きも一同旧家屋から農場に設えられた野外会場まで行進し、祝宴を楽しむ。そうすることで一族の紐帯を固くするのである。

「女王」ブラケット夫人と同じ馬車で到着し歓迎された語り手は、「すでにトッド夫人の友だちや親族を何人か知っていたし、この幸福な瞬間、私はボウデン家の養女であるかのようだ」と感じる(99)。そして実際彼女は、トッド夫人の「娘」として家族に迎えられるのである。

ボウデン農場に到着すると、これほどにぎやかでぜいたくな祝宴は見たことがないと語り手は絶賛する。そして綿密な計画のもと、整然と準備がなされ、いくつもの大きなテーブルの上に花や食べ物が並べられたようすを見て、こう語る。「趣味のよさ、すぐれた技量、きちんとした形式に従うある種の心地よい才能といった遺産を有することで、私はボウデン家の人々を尊敬しはじめた」(105)。慣例どおり儀式をうまくとりしきるすばらしい技を先祖から継承している点を賛しているのである。

さらに語り手は「血は水よりも濃いという古い諺がまったくその通りだとあらためて思った。……氏族精神は心の本能である 生得権や慣習以上のものだ。共通の遺産があることを主張すれば、それ以下の権利は忘れられてしまう。」と述べている(110)。「共通の遺産」というきずなで結ばれた血族の重要性を、この行事の意味も深く考えずに参加した語り手が認識するに至ったのは、注目に値する。

先祖から引き継いだ「遺産」を共有する事実を重視するのは土着主義思想のひとつのあらわれだといえよう。よそから入りこんできたのではなく、元来そこで生まれ育ったことを高く評価するのである。ダネット・ランディングが「とんがりもみ」を連想させるように、この土地とボウデン一族も切り離せない関係にある。彼らも土地に根ざしているという点では植物と同じなのである。先に指摘した村の住人と植物のアナロジーが想起される。語り手を最初に迎えてくれたのはあのモミだった。夏休みで子供のいない学校のまわりは花や草木に溢れる。作品の題名自体、この地域が植物の世界であることを示唆している。人間と植物が一体化しているのである。

ここで、ボウデンの一族再会において食事をともにするという行為が重要な機能をもつことに着目したい。食事にはある特定の場所に住む人々の生活様式、文化があらわれる。そうした性格をもつ料理を分かちあうことによって、会食者の間に連帯意識が生まれる。その結果、会食者はたとえ部外者ではあっても、仲間としてその文化にコミットし、文化を共有することになる。事実一族再会の集いが終わると、ある種の儀式を終えたかのように、語り手は「ボウデン家の真の一員」になった気がするのである（110）。植物を通してふたりの女、さらには共同体の人々が結びつく先述したが、ここでは食べ物も同じような媒体になっているといえよう。

祝宴が終わりに近づくと、工夫を凝らして豪華な装飾が施されたデザートがふるまわれる。とりわけわれわれの印象に残るのはジンジャーブレッドでつくられたボウデン屋敷のミニチュアである。この菓子の家は、窓やドアの位置や庭の花々も本物そっくりで、作品中詳細に描写されるダネット・ランディングの家々を思い出させる。じっくりと鑑賞するに値するこの「家」はしかし、まもなく崩されてしまう。分け与えられたその「家」をみなは「真剣そのもので、あたかもそれが忠実さの誓約であり、しるしであるかのよう」に食べる（108）。この饗宴はボウデン家の聖餐の趣を帯びる。どういうわけか、そこで供されたはずのメイン・ディッシュらしき料理は描かれませんが、聖なる祝宴の最後を飾るデザートは語り手の目と舌とを十分楽しませたのである。

日付や名前が焼き菓子（ペイストリー）を飾り、なかでもアップルパイにはその表面を覆い尽くすかのように、もっと手の込んだ「読みもの」さえかかれている（108）。その文字付きの菓子を人々は、単語ごとに、また文章ごとに切り分けて食べるのである。トッド夫人は語り手に「ボウデン」の一語がのった部分を取り分けてやり、自分は「再会」を食べる。ここで注目すべきなのは食物と言語の結託である。女たちは菓子／（菓子の上の）文字を食べる／消費する。最後には「判読できない断片を除いて」、すべてのことばが食べ尽くされる。

セアラ・ウェイ・シャーマンは「語り手の鋭い視線はいかにことばが肉体になったかをとらえる。これらのペイストリーはボウデン家の具現化した精神を称賛している」と言う。¹⁰ 人々は菓子／文字を分かちあうことによってあたかも共通の祖先をもつことを確認するかのようである。「ボウデン」という文字が象徴する一族を、そしてより具体的にボウデン家を表象する「家」を食べる。すると、いわばかたちのなかったボウデン一族という観念

が人々の肉体になってあらわれるのである。

語り手が「ボウデン」を食べてしまうのも、模造品とはいえその「家」を破壊し食べることによってボウデン家の一員になることができるというのも、皮肉な感じがする。しかしこの食する行為においてボウデンを自分のなかにとり込み、吸収するのである。キリストの聖体の考え方に見られる、神の体を食べることでその体にとり込まれるというパラドックスを想起すれば、ボウデンを食べることでボウデンにとり込まれると考えるのもそれほど不思議なことではないだろう。食べる側が食べられる側の力をとり入れ、自分のものにする。つまりその菓子の家を食べる者は、ボウデン家の血筋、一族のパワーを獲得することになる。結果的にその「家」は食べられて滅亡してしまうのではなく、メンバーに取りこまれ、彼らの一部になり、繁栄していくのである。語り手もまさしく「ボウデン」という文字／ボウデン家を食べてその一員になった。

一族再会のパーティに参加した語り手は、トッド夫人やブラケット夫人だけでなくボウデン家の人々とも親しくなる。行事の傍観者からだんだん参加者になっていくのである。この移行が小説のクライマックス——ボウデン家の一族再会に向けての動きと呼応している。¹¹ つまり物語が進行するにつれ、語り手／主人公はますます共同体世界に入り込んでいくのである。

IV

すでに確認したように、ボウデン家再会の祝宴はつねに一族のつながりを強調するものであった。この一族賛美はだれがこの家系に属し、だれがそうでないかという問題を浮上させる。同じ文化を理解し、共有する人々が団結すれば、その文化集団に属さない者を「他者」として排除することになるのである。

『もみの木』に付随する、ダネット・ランディング物語のひとつ「外国人」(1900年)では、フランス人のトランド船長夫人が共同体において文化的背景や宗教の違う「よそ者」であることが強調される。『もみの木』でも、どこか「よそ者」ふうの特徴をもつ人間は、たとえば「中国人に似ている」などと評されることがある(103)。

ボウデン家に代表されるダネット・ランディングの共同体は、たしかに排他的で均質性に重きを置いてはいる。この一家の集まりが「われわれの国が最近祝うようになった重要な国民的記念日」(110)と比較されることから判断すれば、メイン州の狭い地域を描くジュエットが、アメリカという国が当

時抱えていた移民問題をも意識していた可能性は否定できない。¹² しかし、だからといって、ここで人種問題にまで敷衍して解釈するのは危険であろう。純粋に異質なものを排しようとする動機から、顔に自分たちとは違う特徴があるのを誇張して「中国人」みたいという表現を用いただけなのであろう。ここに人種的偏見が露呈しているとは考えがたい。¹³

再会の集いに向かう途中出会った女性が、自分もボウデン家とは縁続きにあたるというと、その顔から判断するに彼女は一族の者に相違ないとトッド夫人は断言する。夫人は家系のことにに関して誤りが無い、よって外見だけでも一族の者かどうかはすぐ識別できるのだと語り手は思う（91-92）。身内かよそ者かの区別に長けるのは、やはりよそ者排除への強い意識のあらわれである。しかし後に会場で実際この女性には血縁関係がなかったと判明する（111-12）。皮肉にも、身内／他者についてのトッド夫人の判断は、自負するほどのものではなかったということになる。つまりここではよそ者を徹底的に排除しようとする衝動が作者によって客観視されているのである。

ボウデン家の「一員」となった語り手も、「共通の遺産」を有する一族であることの意義を理解したように見えた。ところがもう一方で、すばらしい才能を継承しているのでなければ、田舎の人にしては、彼らがなにもかもこれほど見事にできるはずはない、と考えている（105）。加えて、彼らは所詮偏狭な田舎に閉じこめられているのであり、ふだんは才能を発揮できる機会に恵まれることはめったにないのだ、と冷静に判断する（106-07）。

さらに語り手は「……だが、名前がさまざまになっているのはボウデン家の特徴や所有物がある程度不純なものになってしまった証拠だ」と述べる（110）。血縁関係ではあっても結婚によって姓が変わってしまった者が多いというのである。よその血が混ざり、一族の純潔さや均質性が失われたことを遺憾に思いつつも、語り手はあくまで傍観者の立場を守る。一族結集を本来その場所には属さない人間がいれば外側から眺めるという形態をとることによって、田舎に根づく者とは対照的な都会人の客観的な視線が与えられているのである。

ダネット・ランディングにおいてはよそ者でしかなかった語り手がトッド夫人との結びつきを通して共同体の仲間になったのと同様に、トッド夫人は「外国人」の船長夫人とも親しくなる。¹⁴ トッド夫人は語り手に次のように打ち明けている。

〔トランド夫人〕は私があとにも先にも知らなかった葉草について多くのこと

を教えてくれたの。植物の効能についてもよく通じていたわ……。はじめてお茶に誘われた夜、彼女が料理してくれた卵には薬草が全体にまぶしてあったわ。それにきのこの見分け方を手ほどきしてくれたのも彼女だったのよ。うちの庭にいろいろ珍しい薬草が生えているとわかると彼女はひざまずいて見ていたわ。そう、パセリの正しい使い方を教えてくれたのも彼女でね。料理がほんとうに上手だったのよ。¹⁵

トッド夫人によると、薬草類はもともとダネット・ランディングに生えていた、あるいは少なくともアメリカ独自のものであり、それらについての知識もだれかに教わったわけではなく自力で体得したということになっていた。しかし料理の仕方や、きのこ、野菜、薬草などに関する驚くべき知識は、実はフランス生まれの女性から伝授されたものだった。すべて外からとり入れられたものだったのである。

こうなると、トッド夫人が執着する土着主義があやうくなってしまう。もともと自分が生み出したのではないにしろ結果としてこの時点で自ら手にしているものを高く評価しているのである。自分たちに都合のよい考え方にすぎないように見えるかもしれないが、土着のものに固執しない寛容さもまたあらわれているといえよう。

トッド家を訪ねたフォズディック夫人は、いつもの昔話を繰り返したあとで、「いちいち説明しなくてもわかってくれる、共通の過去で繋がった旧友と話すのは楽しい」と語る(61)。それに対してトッド夫人はこう言う。「旧友というのは最高です。ただし昔からの友だちが用なしになってしまうような新しい友だちができなければの話ですが。」(62)。そのあと語り手とトッド夫人とは「愛情に満ちた眠差しを交わしあ」うのだった。

このエピソードには旧友であるフォズディック夫人よりもむしろ、親しくなってまだ日の浅い語り手のほうが、わかりあえる友人であるということが暗示されているようである。ダネット・ランディングの土に根づく植物を評価することは、同じ歴史、同じ文化的背景をもつ人間を評価することに通じる。しかしここで意義深く主張されているのは、過去を共有する古くからの友人にも価値はあるけれども、新しい友人も劣ることはない、いやまさりうることなのである。

語り手やトランド夫人のように自分とは「共通の遺産」をもたない人々とも、トッド夫人は分け隔てなく親密な関係を確立させている。夫人は、土地の植物や過去、仲間(身内)にしか目を向けないというわけではない。その土地に固着するもの以外を他者とみなす点で、土着主義は他者排除の構造と

根底では繋がるわけだが、その土着主義に対して「よそ者」である語り手のみならず、共同体に密着しているはずのトッド夫人までがかなり距離をおいた立場をとっているのである。閉鎖的な共同体の内部にとどまるのではなく、いわば外界に積極的に目を向け、異質なものを受け入れようとする態度がトッド夫人を通してあらわれている。『もみの木』は一方でボウデン一族に体现される土着主義／排外主義を讀えてみせながらも、他方ではそれに対する問題意識を提示しているのである。

注

- 1 Sarah Orne Jewett, *The Country of the Pointed Firs*, in *The Country of the Pointed Firs and Other Stories*, ed. Mary Ellen Chase (New York: Norton, 1981) 7. ジュエットのテキストからの引用はすべてこの版に拠り、以下ページ数を本文中の括弧内に示す。
- 2 Marjorie Pryse, "Introduction to the Norton Edition," Chase xi-xix 参照。こうした村の状況は、ジュエットの郷里であるメイン州サウス・バーウィックの南北戦争後の状況と重なる。Francis Otto Matthiessen, *Sarah Orne Jewett* (1929; Gloucester: Peter Smith, 1965) 19-20; Sarah Way Sherman, *Sarah Orne Jewett, an American Persephone* (Hanover: UP of New England, 1989) 47-48 参照。
- 3 Nina Auerbach, *The Communities of Women: An Idea in Fiction* (Cambridge: Harvard UP, 1978) 5. 19世紀における女どうしの深い友情についての詳論は、Carroll Smith-Rosenberg, "The Female World of Love and Ritual: Relations Between Women in Nineteenth-Century America," *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America* (New York: Oxford UP, 1985) を参照のこと。
- 4 Elizabeth Ammons, "Material Culture, Empire, and Jewett's *Country of the Pointed Firs*," *New Essays on The Country of the Pointed Firs*, ed. June Howard (New York: Cambridge UP, 1994) 91-92. ジョゼフ・チャーチは、これまでの批評家が見落としてきた、語り手と男たちとの結びつきに注目している。Joseph Church, *Transcendent Daughters in Jewett's Country of the Pointed Firs* (London: Associated UP, 1994) 27-119 参照。
- 5 Sandra A. Zagarell, "Country's Portrayal of Community and the Exclusion of Difference," Howard 40.
- 6 こうした当時の状況と文学的表象については、Eric J. Sundquist, "Realism and Regionalism," *Columbia Literary History of the United States*, ed. Emory Elliot (New York: Columbia UP, 1988) を参考にした。

- 7 Ammons 96. 村共同体をアングロ・ノルマン系の単一民族から成る「純粋な」アメリカとみなすメンタリティについては、Zagarell 40-48 に詳しい。
- 8 Mary Ellen Chase, "Sarah Orne Jewett and Her Coast of Maine, an Introduction," Chase xxiii.
- 9 Josephine Donovan, "Jewett and Swedenborg," *American Literature* 65 (1993): 747 参照。ドノヴァンはジュエットにおける植物を含めたメタファーについて論及している(741-48)。
- 10 Sherman 268.
- 11 Marilyn Sanders Mobley, *Folk Roots and Mythic Wings in Sarah Orne Jewett and Toni Morrison: The Cultural Function of Narrative* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1991) 86-87 参照。
- 12 地方色作家における国と地方の連関についての文学史上の意義は、Amy Kaplan, "Nation, Region, and Empire," *Columbia History of the American Novel*, ed. Emory Elliot (New York: Columbia UP, 1991) 250-51 を参照のこと。
- 13 ザガレルは、人種問題に敷衍し、『もみの木』で賛美される均質性と土着主義が「外国人」において疑問視されていると主張する。しかし前者の物語においてもこの問題意識が窺えると筆者は考える。Zagarell 55 参照。
- 14 トッド夫人から「よそ者」トランド夫人の話を聞かされることで、語り手はトッド夫人に深い共感を覚え、ふたりの連帯感が強まる、とマージョリー・プライスは論じている。Marjorie Pryse, "Women 'at Sea': Feminist Realism in Sarah Orne Jewett's 'The Foreigner,'" *Critical Essays on Sarah Orne Jewett*, ed. Gwen L. Nagel (Boston: G. K. Hall, 1984) 92-96 参照。
- 15 Jewett, "The Foreigner," Chase 170.